

<研究ノート>美人研究への覚え書き

著者	井上 章一
雑誌名	日本研究 : 国際日本文化研究センター紀要
巻	1
ページ	165-173
発行年	1989-05-21
その他の言語のタイトル	A Note on the Study of Beautiful woman
URL	http://doi.org/10.15055/00000954

〈研究ノート〉

美人研究への覚え書き

井上章一

一、面喰い宣言

冒頭から私事で恐縮だが、あえて書く。私は面喰いである。美人には弱い。きれいな女のひとを見ると、心がおどる。

我れながら、はずかしい書きだしである。よくもまあ、いきなりこんな話からはじめられたものだと思う。

もちろん、私にも躊躇はあった。こんなことを書くのはよくないんじゃないか。そのためらいは、なかったわけではない。では、いったいなぜ、私はこの書きだしに逡巡したのだろう。美人が好きだ。ここには、なんらいつわりはない。いたって、

正直な気持ちである。

にもかかわらず、私はそう書くのにとまどった。書ききるためには、かなりの決断を必要とした。いったい、なぜか。どうして、私はこの素直な心情の表明に、これほどのためらいを感じたのか。

酒席で友人たちと語らうときには、こんなことはない。あけすけに、面喰いを標榜することができる。それこそ、品定めいた話題になることさえ、なくはない。

しかし、活字発表を前提とした場合はちがう。とたんに、心のガードがかたくなる。正直な気持ちの露呈をはばかるような抑制が、かけられる。

この抑制の正体をあげざすこと。いったい何が、私の心にプレッシャーをあたえているのか。どのようにブレーキをかけているのか。こうした問題に、私は興味をもっている。面喰いの表明をはばかる抑圧の全体像がえがければ、とまっている。

いまひとつ、私事を語りたい。

以前に、ある建築についての批評を書いてくれとたのまれたことがある。それも、できれば、個人的な空間体験にもとづいてやってくれと依頼された。

さっそく、その建築を見にでかけたのだが、あまり食指をそ

それれない。現代建築によくある配置のわざとらしさに、ややうんざりしたことをおぼえている。

だが、空間体験そのものは、たいへんあざやかであった。じつは、その時のその場にいたのである。たいへんな美人が。

私は、まず彼女の美貌にうたれた。きれいだなという感銘が心のなかにわきおこってくるのを、おさえることはできなかった。

こうなれば、もう建築の空間配置など、どうでもいい。物の数ではない。私は、建築鑑賞をそっちのけにして、目の保養にいそしんだ。

にもかかわらず、である。私は家にかえて原稿用紙にむかった時、その美人についての美的感動を書くことができなかった。

個人的な空間体験をベースにする。このコンセプトにしたがうかぎり、彼女をおとすことはできない。なんといっても、私に最大の感動をあたえたのは、彼女なのである。

だが、私の筆先からは、ついにひとつも彼女についての言葉がながれださなかった。彼女についての言葉は、封じこめられてしまったのである。

けつきよく、その建築についてのほどほどの賛辞と、すこしばかりの皮肉で、批評文の作文をしたことをおぼえている。つまり、私はウソをついたのだ。活字発表を意識して、欺瞞を書きつけたのである。真の感動は隠蔽して。

ここでも、さきほどの疑問はおこってくる。いったい何が、私にウソをつかせたのか。私の真実を封じこめたのか。この問題を考えざるをえなくなる。面喰いを禁じる抑圧の問題である。

二、活字の力

いっぽんに、面喰いは、現代社会ではおろかなことだとされている。ほめられた性癖だとは思われていない。

それは、現在出版されている人生論などの書物を読めば、あきらかである。人生とはなにか、友情とは、恋愛とは、などといったことを論じたてた本である。

これらの書物のうちで、面喰いをほめたようなものは、まずない。女のねうちは顔かたちから判断しろ、などと書きつけたものは皆無である。現代の倫理は、面喰いを批判する立場にある。たとえば、堀寿子はこう書く。

「女性の魅力を計るのに（美人）という物指しかもてない男性は幼稚なのです」（『女性のやさしさ』二〇章 一九七六年）。

「若い男性は幼稚なものですから、美人でさえあれば……：たちまちメロメロになってしまう」（『女性のかしこさ』二〇章 一九七七年）。

いまひとり、小池真理子のコメントを紹介しておこう。やや悪ぶったポーズを売りものに行っている作家だが、それでもこうのべている。

「見せかけだけの男は、見せかけだけのパートナーをほしが

のだ」(『知的悪女のすすめ』一九八一年)。

面喰いの男は「幼稚」であり、しょせんは「見せかけだけ」だという。いずれも、面喰いを、おろかなことだとわらっている。

もっとも、これらはみな女性作家の文章である。男性作家の人生論なら、もっとべつの判断をしているのではないか。そう思われる読者もあるう。

だが、この点についての記述は、男の場合も同じである。人生論の体裁をとっているかぎり、面喰いを肯定的にえがいたものはない。みな、否定的にこの性癖を論じている。たとえば、源氏鶏太はつぎのように書く。

「美人であることも結構だが、男でも、その顔だけに惚れるようなのは、たかが知れている。また、実際問題として、そういうことはめったにない筈である」(『女の頭と心』一九七二年)。

つづいて、畑山博の言葉を引いておこう。彼は、面喰いをこう論断する。

「よく『魅力とは人より秀れた才能、秀れた美貌のこと』だと思っっている女性が多いようだが、それは違う。少なくともある程度以上のレベルの知性を持った男たちが感ずる魅力は違う……知的なレベルの高い人間は、もの的美醜を一元的には見ないものだ。例えば女性の美醜ということでも、ただ単純に官能的な見方ばかりしない」(『いい女・いい出逢い』一九八四年)。

面喰いの男はたかがしれている。知性のレベルがひくい。ふ

たりとも、そう書ききる。源氏鶏太にいたっては、顔にはれる恋は「めったにない」と断言する。

この点をさらに強調するのは、虫明垂呂無である。彼は、そもそも面喰いなどありえないというような文章を書きつける。

たとえば、つぎのように。

「男性は女性の容貌にひかれるのではなく、彼女の反応に目をむけているのだ、と、まず考えてもらいたい……僕ら男性がある女性を美貌の持主だからといって、彼女の印象を深くしているとは思わないでほしい」(『愛されるのはなぜか』一九七五年)。

しかし、である。これらのコメントは、すくなくとも私の実感にはそぐわない。

私は、しばしば「美貌の持主」に「印象を深く」する。だが、虫明垂呂無は「僕ら男性」はそんなことをしないと書く。いたい、私は「男性」ではないのだろうか。

冒頭でものべたように、私は面喰いである。だが、畑山博によれば、私は知的なレベルがひくいということになる。いったい、私は馬鹿なのか。

まあ、私は馬鹿なのかもしれない。その点は、あまんじてうけいれよう。

だが、私が日頃その知性を尊敬してやまないひとびとも、私を見るかぎりでは、たいいてい面喰いである。美人が好きである。いったい、彼らは馬鹿なのか。

さいわい、この点については、梅棹忠夫からコメントをもら

うことができた。梅棹は、伶俐な分析と雄大な構想により文明史を展開する人類学者である。彼の知性については、立場のちがいをこえ、多くのひとがみとめるところであらう。

その梅棹も、やはり自分は面喰いだと告白する。ここに、月刊『みんなく』に掲載された梅棹と私の一問一答をひいておこう。

〈井上〉先生は面くいでしょうか。

〈梅棹〉だれでもそやがな。(笑) 美人はいいにきまっています。

〈井上〉そうですね。ところが、女性むけ人生論の書物では、顔で女を判断する男はばかだという。

〈梅棹〉ステレオ・タイプ化したテーゼですね。(一九八八年六月号)

梅棹は「幼稚」である。堀寿子の言葉にしたがえば、そうなる。あるいは、畑山博によれば、「知的なレベルの」ひくい人間となってしまう。

しかし、私にはとうていいうなずけない。やはり、これは人生論の指摘のほうがちがっているのではないか。あるいは、無理があるのではないか。そう考えざるをえない。

おそらく、面喰いの度合いと知性のあいだには、さしたる因果関係はない。美人は、「知的なレベルの高い人間」も、そうでない人間も、ひとしくひきつける。常識的には、こう判断す

べきだろう。

ここで、田辺聖子による『毎日の美女』(一九七九年)という小説を紹介しておく。大阪のあるオフィスを舞台にした小説である。

このなかに木原梢というOLが登場する。たいへんな美人であり、職場の人気をあつめている。彼女には、オフィスをとおずれる来客みなが、賛嘆をおしまない。出入りの業者も、「知性あふれる紳士」もみな見はれることになる。

田辺聖子は、梢の友人のモノローグというかたちで、つぎのような人間観察をのべている。

「知性あふれる紳士……はにこやかに事務所を見渡し、ついで梢に視線をあて、(ホホウ!)という顔になり、男の好奇心をむき出しにした。

それは、ウチのがさつな男たちや、お天気屋の気むずかしい桜井課長が、梢をみたときに浮べる表情と同じであった。

(べっぴんやなあ!)

と、ツバのとびそうな強い発音をするときの表情である。

よって私は、別嬪を発見したときの男の感動と興奮と喜悅、憧憬、好意は、教養の有無、人格の高低に限らないと思うようになった。

倉庫の爺さんから、文化人にいたるまで、男は、梢に注意を払ってゆくのである」。

おそらく、世間の実情は、田辺が指摘するとおりであらう。

美貌のあたえる感動は、「教養の有無」や「人格の高低」のちがいを問うまい。この点は、人生論のほうがおかしいのである。

心理学者の国分康孝も、こうのべている。

「ルックスがよいから惹かれたといえはいかにも軽薄な人間だ
と思う人がいる……しかし、これは少々無理な自己暗示であ
る」(『女性の心理』一九八二年)。

面喰いはおろかなことだ。源氏鶏太や畑山博らは、人生論の
なかでそう書く。だが、これは、国分もいうように「少々無理
な自己暗示」であろう。

じっさいには、美人が好きなのだが、人生論の書物ではそれ
とは反対の言辞をつかう。邪推にすぎぬかもしれぬが、その可
能性もあるだろう。

では、なぜ彼らはそうした「無理な自己暗示」を文章化して
いくのか。

冒頭で私が逡巡したように、活字の世界には、執筆者の記述
を束縛する力がある。この力が、「面喰いを没知性的と評する文
章を動員させたという面はあろう。

じっさい、書物をつくるということが執筆者をしぼる力は、
きわめて大きい。このことは、たとえば、奥谷礼子があらわし
た「女を読む・動かす・拓く」を読んでいくとよくわかる。こ
こに、そのうちの一部を引用しておこう。

「ちょっと過激な発言をしたいと思えます……もし、新入社員
の面接時に、同じ能力の者が残ったら、ルックスのいいほうを

残す、というのが私の考えです。内心私と同じ考えを持って
いる人が多いはずです。しかし、何かと差し障りがあって口に出
せずにいるのかもしれない。それをあえて私は口に出してい
うべきだと思っています」(一九八六年)。

彼女は、人事をルックスだけでおこなえと言っているわけ
はない。同じ能力なら、ルックスを選択の要素にしると論じて
いる。そう無茶なことを主張しているわけではない。前者にく
らべれば、穏当なところもある発言である。

にもかかわらず、彼女は自分の発言を「過激」だと言う。
「差し障りが」あることを、「あえて……口に出し」たというの
である。

活字発表を意識する場合には、これだけのプレッシャーが執
筆者にかかってくる。このプレッシャーが人生論の執筆者にも
作用した。そのため、「無理な自己暗示」と評されるような
記述がつけられたという側面は、あるだろう。

三、文化の力

さきほどは、執筆上の体裁ということを問題にした。あから
さまな面喰いは、活字の世界では、表記をはばかる。とくに、
人生論などといった場では、明示をされたほうがいい。こうし
た判断が執筆者にはたらいだ可能性を指摘した。

タテマエとホンネというべきか。執筆上の処世術というべき
か。しかし、いずれにせよやや卑俗にすぎる解釈だといえるだ

ろう。

面喰いを非難する言葉には、処世をこえた思想的な背景もあるのではないか。

この点で興味深いのは、哲学者・鶴見俊輔の反応である。彼は、「先生は面喰いですか」という私の質問に、こうこたえた。活字発表についての了解は、もらつてあるので、ここに公表するしだいである。

「女のひとを、外見や容姿で判断するのはぜったいによくないという信念をもっている。ただ、さんねんながら、その信念のとおりにうごいたことは一度もない」（一九八七年三月一九日 京都・徳正寺にて）。

彼は、どうどうと自分が面喰いであることを公言する。にげも、かくれもない。処世ゆえに、オフレコをたのむこともない。だが、一方で、面喰いはよくないという信念も、もっているという。そして、彼は執筆上の体裁や配慮から、そののべるわけではない。彼にとつてそれは「信念」の問題なのである。

鶴見俊輔が、かつて吉本隆明と、転向をめぐる論争をくりひろげたことは、よく知られている。つぎに、この吉本の美人論を検討してみよう。私のみるかぎり、吉本ほどこの問題にこだわった思想家は、現代の日本にはいない。

吉本の言葉を引用する。「『歎異抄』の現代的意味」と題されたエッセイのなかで、彼はつぎのような問題をなげかける。

「きれいな女性とそうでない女性がいるとするでしょう。する

ときれいな女性に惹かれるでしょう。それどうしてなのか、ぼくはわからないですね。それに遺伝的にかたにか物質的基盤に差別が、格差があるのはけしからんと、ぼくは理念的におもつていても、きれいな女性に惹かれる。これは矛盾じゃないか、じぶんでおかしいじゃないかとおもいますよ。しかし、きれいなものに惹かれるのは疑えないでしょう」。

「きれいな女性」にひかれる。だが、そんな自分は「けしからんと……理念的におも」う。

鶴見のモノローグと同じタイプの思考である。現代日本を代表するふたりの思想家は、立場のちがいをこえ、美人については、まったく同じ信念をもっている。

ここで、注目すべきは、この吉本隆明と林真理子の論争である。吉本は、経済学者・栗本慎一郎も参加した座談のなかで、林とこの問題を論じあう。少々長くなるが、これをつぎにひいておく。

〈吉本〉綺麗な人と綺麗じゃない人とか感じがあるでしょう……
……ゆきずりに出会ったら、ああ綺麗だなとか、そういうことで眼を向けちゃうことってあります。それはとても不思議なことみたいに思います、なぜ人間はそうなのか……ぼくはどこかで、それはおかしいんじゃないか？ という感じ方があるんですね。

〈栗本〉おかしいというか、不思議だということですね。

〈吉本〉そうですね。つまり人間のとてもいかがわしいところなんだって感じがあるんです。

〈栗本〉道徳的にそれはいけないとか、そういう話じゃなくて……。

〈吉本〉道徳的なものじゃなくて。

〈栗本〉不思議だと吉本さんがおっしゃったことは非常に重要なことで……。

〈吉本〉そうそう、不思議だなという。

〈栗本〉不思議でしょ？

〈林〉いや、(断固とした口調で)あたし全く不思議だと思わないですね。

……

〈吉本〉男女間の好き嫌いとか愛情と、容貌とはあんまり関係しないんだっていうふうにごどこかと思うはずなのに、あなたはいつでもあんまり思っていないみたいところが、ぼく不思議でしょうがない。

〈林〉あ、そうですか？ (手をすり合わせながら)あたしは、人間、顔より心だなんて思ったこと一回もないですね。

〈吉本〉ああ、そうですか。顔だ、ということですか？

〈林〉ノー、アノー、例えばあたしは、はっきり言って醜男よりもハンサムな男の人のほうがずっと好きなんです(恋愛幻論 一九八六年)

吉本は「綺麗な人」にひかれる自分にこだわらる。「不思議」だし、「いかがわしい」という。栗本も、この吉本のこだわりに同意する。そして、林にも共感をもとめる。

だが、林は同意しない。「あたしは……ハンサムな男の人」が好きだとこたえる。

片方は、美人にひかれるのが不思議だという。そして、もう片方は、不思議でもなんでもないという。

論争は、並行線をたどる。あゆみよれる部分はない。それぞれが自分の感受性を語りあい、それがたがいに正反対となる。

これは、決着のつく論争ではない。じじつ、この問題は、けっきょくうやむやのままに、ほうっておかれることになる。

だが、どうだろう。おそらく、吉本隆明に共感する読者は、そう多くはあるまい。美人を好きになる自分が不思議であり、

いかがわしいと考えるひとは、ごく少数だろう。

たいていの男は、そういうこだわりなしに美人にひかれていく。梅棹忠夫の言葉をかりるなら、「だれでもそやがな。美人

はいいにきままっている」はずである。

また、多くの女も、美人になりたいと思うだろう。林のいうように、「ハンサムな男の人」が好きな女も多い。

吉本は、大衆からうきあがった知識人像をきらう。「大衆の原像」と連帯することをうったえる。コム・デ・ギャルソンを着こなすことにさえ、思想的な意味づけをする。希有の思想家である。

だが、ついに吉本は大衆にはなりきれない。あこがれてやまない「大衆の原像」とは、どうしても一線を画してしまう。くたたくなく美人が好きだといいきれない。そこにこだわるインテリなのである。

吉本の思想家としての魅力は、しかしここにある。「大衆の原像」にせいっぱいちかづこうとして、ちかづききれない。そのあたりのバランスのきわどさが、文章のおもしろさにつながる。そういう思想家なのだ。

ずいぶん、吉本隆明にこだわった。美人論に話をもどそう。たいていのひとは、こだわりなく美人にひかれる。だが、なかにはこだわるひともいる。吉本がそうだし、栗本もそうである。鶴見俊輔にも、美人が好きで自分にたいする反感がある。不自然なこだわりである。そう、あえて不自然だといいきることにする。

おそらく、この不自然なこだわりをつくったものこそが、自然とはちがう文化の力なのだ。吉本らの感受性には、この文化がどうしようもなくくいこんでいる。彼らは、文字どおり文化人なのである。

面喰いをおとしめる人生論も、けっきょくはこの文化にねざしている。「少々無理な自己暗示」は、この種の文化がなければささえられない。

だとすれば、面喰いを批判する言葉の数々を歴史的においかけていけば、ひとつの文化史がえがけるのではないか。

たとえば、面喰いは知性がひくいという言いまわしである。たしかに、こういう言葉づかいは、現代の人生論ではよくみかける。紋切型になっているといえるだろう。

しかし、こうしたフレーズが人生論の書物に顔をだしはじめたのは、そう古いことではない。ごく最近の現象である。管見によれば、この言いまわしが常套句として定着するのは、第二次世界大戦以後の現象なのだ。

面喰いは知性がひくい。この言葉は、超歴史的に流通しているわけではない。歴史のある段階から普及しはじめた、まさに歴史的なものである。

人間の実感にあらうものなら、歴史をこえてあらゆる時代に存在しつづけるだろう。たとえば、美人が好きだとか美人になりたいといった気持ちは、超歴史的に存在する。どういふ形姿を美人とするかは時代によってちがうが、美人へのシンパシーは時代をこえて普遍的にありつづける。

美人についての「無理な自己暗示」は、人間の実感にはねざさない。文化の産物である。そのため、超歴史的な流通はありえない。時代ごとの文化状況に左右されることが多くなる。じつ、面喰いは知性がひくいとす言説は、ようやく第二次世界大戦後になってから、ひろく普及するようになった。

私は、今、この問題についての「無理な自己暗示」の歴史をえがいてみたいと思っている。

美人にひかれるのは不思議だという観念。この文化的な観念

は、どのような言語表現を歴史的にくりひろげてきたのか。今は、面喰いは知性がひくいという言葉が流通している。では、それ以前には、どのような言いまわしが普及していたのか。そういう歴史をえがきたい。